

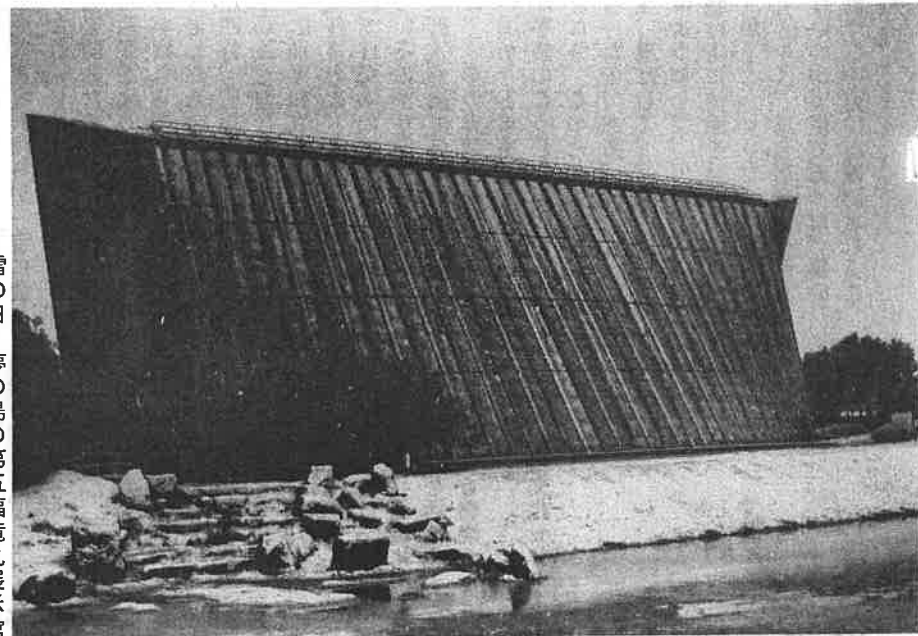
福竜丸だより

(財) 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

新年のあいさつ

三宅 泰雄

新年おめでとうございます。
昨年末には、米・ソにより、はじめて核兵器の削減条約が結ばれ、明るい話題を提供しました。しかし、削減される中距離核戦力(INF)は核戦力全体の五割にも満たず、核兵器全廃には、ほど遠いともいわれています。
世界の主要国は、米・ソを主軸とする二つのブロックに分断されています。不幸なことに、両者の間には、抜きがたい不信任、憎悪、敵が心が醸成され、お互いに相手を人類の敵、不具戴天の仇とみなしています。
私はアメリカには長く住み、ソ連にも再度訪れたことがあります。そこで感じたことは、市民の生活には、多少の差はあれ、お互いに大した違いはないということです。違うのは、それぞれの政府が、あらゆるチャンネルを通じて、相手国を批難し、核戦力保持の重要性と必然性を、国民に説得しつづけていることでした。核兵器の廃絶を願う私たちは、この憂うべき、かつ危険きわまりのない現実には、どう対応したらよいのでしょうか。最も大切なのは、政治的イデオロギーの是非より、人間の生命ではないでしょうか。
今年本協会が第五福竜丸保存平和協会として発足(一九七三年)以来、満十五年目を迎えます。新年にあたり、決意を新たにして、平和教育のためにつくつくと願っています。
(第五福竜丸平和協会会長)



雪の日・夢の島の第五福竜丸展示館

第五福竜丸をとらえる……

作品介绍①
ベン・シャーン

第五福竜丸の被災に関心を持ったベン・シャーン(アメリカ、一八九八〜一九六九)は一九六〇年

「ラッキー・ドラゴン・シリーズ」を制作した。「なぜ?」「われわれは何が起きたのか知らなかった」「私は夢見たことさえなかった」「焼津」「物理学者」「訣別」など、30余点の連作の中で水爆実験の非人道的性を人類全体の体験として描こうとしたのだった。
『二十羽の白い鳩』はその中の代表作で、怒り狂う「ドラゴン」と、久保山愛吉さんの遺影を囲むように飛翔す



る鳩が対比され、悲しみに耐える子供の表情の中にベン・シャーンの静かな怒りが伝わってくる。
「ドラゴン」は船名としてではなく、怒りの象徴として描かれている。それは、『物理学者』が持つフレントゲンの写真の上に、また『われわれは何?』の驚きおののく人間の頭上にも、『焼津』の町の片隅にも現れている。
ベン・シャーンは、いつも貧しい者、社会の片隅の者、しいたげられた者へ目を向けていた。このシリーズは、無実の罪で電気椅子に送られた「サッコとバンゼツ」二十羽の白い鳩
(一九六〇年制作)

編集後記

▼あけましておめでとうございます。今年も展示館宛にたくさんの方の年賀状をいただきました。ありがとうございます。▼一月九日、宇野重吉氏が亡くなられた。宇野氏というと、忘れられないのが新藤兼人監督の「第五福竜丸」の久保山愛吉氏の役である。慎しんで冥福をお祈りしたい▼今年もつ年。展示館が開館した年もたつ年でした。福竜丸の飛躍の年。

是非御参加下さい
●三・一ビキニ事件記念集会
とき 3月1日(火)
午後六時半〜九時
ところ 文京区民センター
三A会議室
△JR線「水道橋」駅下車
挨拶 三宅泰雄
講演 大石又七(福竜丸乗組員)
服部 学(立教大学教授)
映画 「核戦争」(カラー・アニメーション)
参加費 二百円
主催 第五福竜丸平和協会

INF以後の被爆体験 証言活動の活性化を

高橋 昭博

昨年十二月八日から始まった米ソ首脳会談により、中短距離核廃絶条約（INF全廃条約）が調印された。このことは、世界最初の、広島への原爆投下によって始まった危険な核時代の終幕を告げる歴史的な第一歩となるもので、「ヒロシマ」としては、これを素直に評価しなければならない。

これまでの、米ソの核軍拡競争は、文字どおり不信と憎悪と分裂の歴史そのものであった。しかし、会談後の記者会見で、「考えの違いがあっても話し合えるという自信を得た。確かに意見の不一致もあったが、長年の対立から抜け出すことができ、政治的対話が深まった」と、両首脳が異口同音に述べているように、今回の会談によって、信頼と融和へと歴史の潮流を転換させる足場が築かれたと、受け止めるべきであろう。

こうした状況もあるが、このたびの成果をふまえて、今後、戦略核兵器五〇％削減をめざして、米ソの精力的な軍縮交渉がジュネーブを舞台に展開されることになる。しかしながら、戦略核兵器は、中短距離核兵器より一層複雑な核戦略体系となっており、中短距離核兵器の廃絶までに二か年の歳月が交渉に費やされたことを考えると、これからの道程は相当厳しいものがあることを覚悟しておかなければならない。

時恰も、広島においては、「被爆体験証言者交流の集い」が発足した。これは、修学旅行生を中心に被爆体験を語っている広島の人やグループの人たちが一堂に会して、お互いに情報を交換したり、学習会を開いたりして、被爆体験の証言活動をより充実したものにしなければならぬというねらいから発足したものである。

河合理事長の、疑問の投げかけは、公私にわたって長年被爆体験を語り、核兵器廃絶へむけて微力を尽してきたつもりでいた私への痛烈なパンチでもあった。長い間のマンネリに目をさまされた思いでもあった。

河合理事長は、「私は平和問題では全くの素人だ。これから勉強を積み重ねて行く」と言われる。しかし、平和問題には専門的な知識より熱意と発想の転換をいかにすべきかが、大切になってくると思う。私もこれから、常に新鮮さを保つ努力を怠らぬが、INF全廃条約発効後に照準を合わせた証言活動を活性化するため、限りある生命を燃焼させたいと決意している。

（広島平和文化センター事業部長）



平和随想 (十二)

三宅 泰雄



ビキニ事件がおきたのは一九五四年（昭和二十九）、いまから三十五年近く前のことです。その頃は、どんな時代だったのでしょうか。その三年前に対日平和条約が調印され、我が国もようやく、六年間の占領時代を脱し、独立を回復しました。当時の重要なことは、一九四九年にソ連が最初原爆実験に成功、中華人民共和国（中共）と、ドイツ民主共和国（東独）の成立などです。翌年二月には毛沢東がモスクワを訪れ、スターリンとの間で中ソ友好同盟相互援助条約を締結しました。これらはソ連を力づけるとともに、アメリカ側は警戒心を強め、米ソの対立は緊張の度を加えました。占領下の日本はマッカーサーから共産党の非法化、同調者の公職追放を命ぜられました。その直後に朝鮮戦争が

勃発、マッカーサーは国連軍総司令官に任ぜられ、国内に警察予備隊（自衛隊の前身）を創設しました。ストックホルム・アッピールの発表は、中ソ条約の締結直後でした。朝鮮戦争では、中国人民義勇軍の出兵で、国連軍が苦境に陥ったため、トルーマンは「原爆使用もありうる」との重大発言をしました。しかし、翌年（一九五一年）四月、マッカーサーは中国本土への進攻を声明したため、そのトルーマンによって、総司令官の職を解かれ、リッジウェイと交代しました。これは朝鮮戦争の不拡大が、もともと国連の基本方針であったことを、物語るものです。

朝鮮戦争は一九五三年七月に終結しました。この間、日本の財界は特需のおかげで、息を吹き返したといわれていますが、国民にとっては、まだ極貧の時代でした。国の一般会計が、やっと一兆円をこえ、国民総生産（GNP）は約八兆円、人口は約九千万、国民一人あたりのGNPは九万円弱、国民の平均収入は一月に一万円か二万円でした（現在は一般会計五六兆円、一人あたりGNPは約三百万円）。

その頃の核兵器の開発状況を振り返ってみましょう。ソ連の原爆成功に対抗するため、トルーマンは一九五〇年初頭に、水爆の開発を命じました。水爆は一九五二年に完成しましたが、重さが六五トンもあるなど、至って初歩的なものでした。軽量の水爆の完成はソ連に先んじられました。このためローゼンバーグ夫妻がスパイ容疑で死刑に、原爆開発の指導者で、水爆開発には消極的であったオッペンハイマーは「アカ」容疑で追放されるなど、大きい混乱を招きました。ハンガリーからの亡命科学者、エドワード・テラーがオッペンハイマーに代って作りあげたのが、ビキニ事件の元凶となったブラボー水爆でした。第五福竜丸は、まさに米ソの確執と、激烈な核兵器開発競争の谷間で、遭難の憂き目にあったのでした。

アメリカ政府は第五福竜丸の被災や放射能マダロのことを、初めは過小評価し、冷やかな態度をとっていました。しかし、久保山さんの死、水産界の打撃、原水爆反対運動の高揚に、目をつむるわけに行かず、感謝料の名目で二〇〇万ドル（七億二千万円）を支払い、決着をつけようとした（一九五五年一月）。政府はこのうち医療費に二五〇〇万円、久保山

